

藤沢周平と庄内

第二回 「義民が駆ける」の軌跡

荘銀総合研究所
研究員
佐藤 寛子

「私の郷里山形県庄内地方は、東の空を走る鳥海山・月山という姿のうつくしい山をつらねる出羽丘陵と、西にひろがる日本海との間にはさまれた平野と低山地帯の総称である。

出羽丘陵の北端にある鳥海山は秋田県との県境で海に接し、またその山脈の南部は広大な磐梯朝日山系の山々につながっている。庄内平野は三方を山、一方を海に囲まれた形になっている」

(藤沢周平著『小説の周辺』)

過去に庄内市という構想が無かったわけではないが、いまの山形県に庄内という町はない。山形県史をひも解くと、十六世紀後半に初めて「庄内」という地名の記述を見つけることができる。城輪柵や糸里制の跡が語るように、遊佐や大泉などの莊園が早くから成立しており、そこから「荘の内部」「庄内」と呼ばれるようになったことが地名の成り立ちであるという。この土地が庄内藩として歴史の表舞台に登場するのは武藤氏・最上氏を経て、徳川四天王の血を引く酒井氏が入部した頃からである。

藤沢周平の作品に登場する海坂藩は庄内藩に例えられ、作家自身が鶴岡市出身という経歴から、その街並みを鶴ヶ岡城下に求めたと書かれている。現在の市街地に酒井家の名残が強く残されているわけではないが、かつての藩校「致道館」といった建造物や、「家中新町」といった町名に、武士が往来した頃の整然とした町並みを窺い知ることができる。その間、松山や大山といった領地の分割があり、廃藩置県を経て「庄内」という呼称は残った。

庄内の冬は厳しいが、それだけに人々の冬を無事に過ごすための支度や、調度品、生活を取り囲む景観は趣が深い。

吹雪の合間に見える鳥海山は、日本海からせり出す山裾が富士にも似た山容を誇るため、またの名を「出羽富士」と言う。東北随一の標高を掲げる秀峰は、月山が「死の山」として山岳信仰の対象であったように、水の恵みを司る「生の山」として古来より崇められてきた。

近年、自然を尊ぶ意識が薄れるに従って、日本の各地で自然崇拜にまつわる風習や、年中行事も次第に姿を失いつつあるが、庄内には比較的昔ながらの情景が残されているものと思う。

遊佐町に杉沢比山という舞がある。比山は土地に生まれた者のみに舞うことが許された、鳥海山へ奉納する舞楽と伝えられている。

廃仏毀釈の時代に文献が焼き払われても、口頭伝承によって語り継がれた歴史の傍らには、山懐の杉沢地区に生きる人々の祈りがあった。

遊佐の自然にはくぐまれ、杉沢比山は自然のなかで暮らしを営んできた人々によつて、今日まで絶えることなく受け継がれている。

その様子は、風土に胚胎した信仰のようである。

東北は貧困と不遇の時代が長く続いた。

佐幕であった庄内藩や奥羽越列藩同盟に与した東北諸藩の戊辰戦争の悲劇は多く語られているが、中央と分断するかのようにつながる奥羽山脈の、北側にある東北をさげすむような「白河以北一山百文」という評があった。

その雪深さや、蝦夷討伐の伝説が語るように、東北は中央とは相いれない者の住む場所との印象をかつては与えていたのだろうか。



酒田市中町 旧鑑屋



旧鑑屋内部



遊佐町青塚 旧青山本邸



遊佐町吹浦 十六羅漢岩

庄内について言えば、陰鬱な雪に耐え忍ぶように、内にこもりがちで自らを多く語らない土地柄と言われる。殊に明治の世になってからは、黙することを余儀なくされた歴史的な経緯も影響しているものと思われる。持つて生まれた気質と外部の圧力があり、その中で失われていったものと、大切に守り続けてきたものがある。

酒田市には、現在でも本間家や鑑谷家といったかつての豪商の家屋が点在している。

大火により町の半分は消失したが、日本海有数の港町として栄えてきた町の明かりを消してしまわないようにと、市民の力強い連帯によって復興され、西廻航路の開かれた時代の「西の堺、東の酒田」とうたわれた往事を偲ぶことができる。

輸送物資と、人の往来が途絶えることなかった町並みに、人々の生命の躍動を見る。

今に伝えられる暮らしの跡、歴史の温もりや、息づかいを聞き、ゆるぎない伝統に支えられた郷土の美しさを思う。

それは貴族文化のような華やかさや、権威の庇護の上に成り立ったものではなく、ある種、凡庸にも見えかねない。

けれど、物の飽和した二十一世紀に生きる私たちは、飾り立てることのない、庶民の生活に根差した素朴な様相に、感動を覚える。庄内の繁栄は、平野や日本海の波濤とともにあり、人々は恵みをもたらす自然に敬虔であるとした。

自然が厳しいほどに、信仰心を厚くした。そして厳寒の季節を越えたところに、春の喜びを見出してきた。

その昔、詩人や文学者、栄華を極めた者が都を捨て北国へ向かったという記録がある。清川の関を越えた義経も、象潟へ行こうとした西行も漂泊の思いを抱えた彼らが、自らに課したものは峻厳の路であった。さらびやかな名声や、行き過ぎた富には奢りがある。

庄内の風土には豪奢な色を好まない、生活に適った温かさがある。「日本を風靡している規格品的な物質文化ではなく、農民が自分たちの手で作った本物の文化がそこにあったと思うからである。

それは庄内地方のあちこちに、断片の形であるにせよ、まだ残っていて、その風土を特色あるものにしていく。失われつつあるために、それらの断片は、いつそ光を放ってみえるようである」

(藤沢周平著『周平独言』)

義民が駆ける

かつてこの庄内平野を守るために、殿様から農民まで一丸となって戦った歴史がある。

私たちの殿様を動かさなさい、と將軍に直訴するため初春の雪深い庄内から江戸へ上った天保の義民と呼ばれた人たちがいた。

「義民が駆ける」は藤沢周平が幼い頃に耳にした三国領地替を題材として描いた作品である。この騒動は「天保一揆」として人口に膾炙した話であるが、新領主となる川越松平家の過酷な年貢の取り立ての噂に恐れをなした農民をはじめ、表沙汰にはされていないが、禄を失うことになる武士、権益を失うことを恐れた商人に至るまで、領民が一丸となって酒井家の移封反対運動を展開したのである。

この一揆は、江戸期全国で見られたように封建社会における藩主への不平不満に起因するのではなく、その理由が酒井家への思慕の情から出たとも言える点に特異性がある。

農民の行動は美談として現代に伝えられているが、藤沢周平は郷里を舞台に展開された天保一揆の真相に迫り、將軍へ差し出した嘆願書でうたわれていた藩主への思慕の下に、明日の生活を案じる農民たちの保身の意識を探し当てる。

「調べ直してみると、なかなかこれまで考えていたような単純な事件でないことに気づかされたのであった。

百姓たちは、なぜ旗印に二君に仕えずと書いたのか、また建札になぜ自らを忠義一同と記したのか。あるいは彼らが残した記録に、なぜ辟易するほどしばしば、藩の善政をたたえ、その恩に報いる旨の記述があるのか」

(藤沢周平著「義民が駆ける」)

天保十一年、幕府は長岡(新潟県)藩主牧野備前守忠雅を川越へ、川越(埼玉県)藩主松平大和守齊典を出羽国庄内へ、庄内藩主酒井忠器を越後国長岡へ領地替する命を下した。庄内藩にとって、この決定は正式な評定を経たものではなく、理由なくして石高が半減される左遷ともいべき扱いであった。

当時の資料は、発覚した際の処罰を恐れ、意図的に文献を残さなかったことや、極秘裏のうちに処分されてしまったために、見る機会に恵まれることが少ない。しかし幕命撤回から百六十年余り経たず、致道博物館において天保一揆の足取りを辿る特別展が開催された。

水野忠邦の書状や旗に混じって、圧倒的な存在感を放っているものは、「夢の浮橋(酒井神社蔵)」という絵巻が告げる、過酷な生き方を強いられてもこの庄内を守るために立ち上がった農民の姿であった。

老いた母を残して駕籠訴に行く者、その旅費を工面するために娘を遊郭に売る者、嘆願書を背負い雪深い庄内から実に四百⁺の苦難に満ちた山坂を分け入って江戸へのぼろうとする人々の姿は、庄内が踏んだ歴史の蹊跡を語るに十分と言えた。

庄内の歴史は苦難の連続と、困難に立ち向かう歴史であった。

困難は為政者によって、時には自然の猛威によってもたらされた。

港都酒田市や、ニシン漁で財を成した青山留吉等を輩出した遊佐をはじめとし、庄内地方の発展は、日本海や最上川の水運に支えられたところが大きい。だが、その影には悲惨な海難事故もあつたと聞く。今日名勝とされる吹浦の十六羅漢も本来は海難忌避を祈願して建立された石像である。天保の義民だけではない、そこにはいつの日も家族の安全や、穏やかな明日の生活を願う人々の祈りがあった。

自然条件が厳しいほど人々の信仰は厚く、厳しさに負けることのないように一途な気持ちで育んできた。

目をこらすと私たちの郷土には、実に多くの先人の軌跡があることに気がつく。

海岸沿いに続く松林や、川の氾濫を食い止めるために気の遠くなるような歳月を重ねて完成された堰、今日の庄内があるのは、私を捨てて郷土のために尽力した人々の熱意があつたからではないだろうか。

藤沢周平は幼い頃から、慈しんで田を育てる住民の姿を心に刻み、作品の中でよく描いた。水や緑の豊富な庄内平野の中を駆け巡って大人になり、作家として大成しても、故郷を軽んじることがなかった。生涯、人間の首みを内包している自然の大切さを書き続け、自然への感謝の心を失うことがなかった。

それは作家自身が、農の国を母胎として育った人だったからである。

幕府が転封の命を出した真偽は明らかでないが、將軍家斉と大奥時の老中水野忠邦の私情が絡んだ継嗣騒動を原因とするのが通説である。

財政が窮乏していた川越藩が、將軍家から養子を迎えるにあたり、神田大黒(庄内藩の江戸屋敷は神田にあった)の異名をとるほど富裕であった庄内への転封を交換条件として提示したとされる。庄内藩は石高十三万八千石であるが、実収は二十万石以上と聞こえがあった。

「明治になってから庄内地方の耕地を測量し直したら、実測面積は旧藩時代の一・九九倍、つまりほぼ二倍に達したという。きびしい検地で農民をしぼり上げるのは為政者の常套手段のようなものだが、庄内藩は藩政初期をのぞけば、あとはそれをしていないということである。

その数字には、政治上の理由というものも隠されているかも知れないが、もつと具体的には、そこまでやらなくとも藩財政をやりくり出来た、庄内という土地の豊かさが現われているように思われる。

庄内地方は、藩政時代に何度か凶作に見舞われ、ことに貞享、天保の凶作ではかなりの被害を出した。しかし数次にわたる凶作の中で、餓死者を出したのは延宝二年の凶作のときだけである。歴史的な大凶作と言われた天命の飢饉のときも、餓死者が相ついで南部、津軽にくらべ、稲作は三割減の程度にとどまり、むしろ他領から流れこむ飢餓人に救いの手をのべている」

(藤沢周平著「小説の周辺」)

国替えを阻止するため江戸に上ったのは、飽海地区・西郷組を中心とした農民たちとされている。蓑・笠姿の彼らは一見して庄内から出てきた農民とわかり、百姓において前代未聞の訴え、酒井は良い百姓をもつてしあわせだ(藤沢周平著「義民が駆ける」)と、諸藩の同情をかけたという。集会に参加した人間も含めると、転封阻止にかかわった人の総数は十万人とも伝えられる。

このような反対運動の影には指導者となった玉龍寺(遊佐町)の文隣和尚や、奉行所で公に幕府の内情を暴露した佐藤藤佐一門といった、暗躍する人の姿もあった。さらに資金面でこの運動を支えたのが酒田の豪商本間光暉だったと言われている。

近年の五穀豊穡を素直に喜ぶことのできない時代でも、草木が芽吹き、庄内平野が新緑豊かな地になると、長く厳しい冬を過してきた者にとって、それは至上の喜びとなる。

この何気ない積み重ねの日々の、ささやかな幸せが続くようにと願った人たちがいた。

幸せな時代に生きる私たちは、今年も雪が多いと文句を言いそうになるが、この沃野は、実に多くの人によって守り伝えられてきたことを記憶にとどめておかなければなるまい。

(写真提供・遊佐町総務企画課)



旧鑑屋内部



日和山公園